

波多はたの横山の巖研究

森 本 治 吉

(一)

十市皇女、伊勢神宮に参まゐります時、波多はたの横山の巖

を見て、吹黄ふき刀や自のの作る歌

河かの上のの五百箇ひゃくつ岩つ群ぐんに草生くささず常じょうにもがもな常じょう処じょ女にて

I 一二二

万葉地理研究上の一大難関の問題歌である。先づこの歌に關して「波多の横山は何所ですか？」といふ問をよくかけられる。この質問に対する答は、いたつてたやすい。答の根本的な部分には既に平安朝或は江戸時代に提供されてあると言へる。

即ち、波多は伊勢国一志郡の八太村はたむら（現在三重県一志郡川合村字波多はた）の地である。

この地は和名抄伊勢国一志郡の部に「八太（鉢多）」とあり、延喜式の波多神社もここに在る。又、筆者はまだ訪れないが、八太山班光寺といふ古代の寺院の遺跡もここであり、そこから白鳳期の瓦其の他の遺品が出土したといふ事を松阪市の森田利吉氏から聞いた。

これ等により、ハタといふ土地の存在した事とその所在地は問題ない。問題になるのは、(甲)題詞の中の「横山」を何所に在ると見るか、といふ事と、(乙)歌の上句の「河の上の岩群」を何所に在ると見るか、といふ二点である。

これに就いて、古来の主要な文献を挙げてみると、次のやうなものがある。

宣長の菅笠日記に曰く、「三渡みわた（松ヶ崎村字六軒）より二里、八太と云駅あり、八太河（波瀬川）は板橋なり、渡りて田尻村と云より、漸々山路にかかりて谷戸たに大仰たいやうなんと云里過ゆく、大きな川あり、雲出川の川上とぞいふ、川辺を登り行くあたり景色いとよし、大きな岩ほど山にも道にも川の中にもおほく、所々に淵のあるを見くたしたるいとおそろし、かの吹黄の刀自歌よめりしも此わたりならんと、泉居の大人の曰れしは、実にさもあらんかし。」

「五鈴遺響」所載の一説に曰く、「又波多ノ横山ト徴スルハ此処ノ異位ニ同郡八太村アリ延喜式波多神社坐シ和名類聚八太郷ナリ然レハ此地モ八太郷ノ内ナルヘシ故ニ前人皆此地ノ有トス猶古昔ノ大倭ノ京ヨリ本州へ至ル街道ナレハ十市皇女阿閉皇女ノ巡興セシ処ト云モ宜ナリ」

万葉三国地志に曰く「波多横山、……按、天武天皇四年二月、十市皇女、阿閉皇女、参赴於伊勢神宮事天武紀に見えたり。此時の詠歌なり。

……波多横山を大和国山辺郡仲峯山とし、或は鈴鹿郡河上の地とするものは、恐らくは皆誤る。此時の帝都は、大和国飛鳥にして伊勢

へ来往の人、今の鈴鹿路は通らず。然ときは波多山は、当郡の八太村の山、河口関越の順路にあたり。此を是と定むべし。」

伊勢名勝志に曰く「波多横山 湯都磐村 湯都磐森

八太村に在り往昔大和街道ニ属ス按ズルニ其地域ハ鈴鹿郡関又ハ小野村ニ在リトシ或ハ伊賀名張郡及ビ大和山辺郡又ハ本郡大仰村八太村ノ地ナリトシ諸説紛々考フ可ラズ今暫ク本村ヲ以テ之ニ充ツ（五鈴遺響、三国地誌、古屋草紙）」

波多神社

「八太村ニ在リ宇賀神、倉稻魂神、天水分神ヲ合祀ス創立年月詳ナラズ祭日一月十七日六月八日九月八日」
共ニ陰曆

大日本地名辞書に曰く「八太郷和名抄、壹志郡八太郷、訓鉢多。

今川タテ合村（大字八太）高岡村是なり、雲出川の北方に彎曲せる圈内の地を曰ふ、波瀬川南西より来り之を貫き、雲出川に入る。

神鳳抄「一志郡八太御厨、又八太御厨とあり、大字八太と田尻（高岡村）は波瀬川を挟み、郷中の首邑にて、伊賀宇陀への通路之に係る。」

以上江戸時代から明治期までの学者の説を掲げた。普通の註釈書、又現在の人々の説は、読者の容易に閲読される機会が多いと思つてこれを省く。

以上の諸説を精査して筆者のどうも不安に考へる問題は、諸家の挙げられる候補地が何れも現在のハタの地、即ち川合村字八太の地から距離が離れ過ぎてゐるといふことである。

無論昔は広かつた地名が、新興の地名に位置を譲つて、自らは小な字の名となつてゐる場合は多々例がある。だからハタといふ名称も昔は広かつた事であらう。現に今日一志郡に赴いてみると分る

が、川合村字八太の西南方に小山なといふ小字がある。さうして、この小山部落の西にある高地を「八太の小山」といふ名でよんでゐる。これからすると今の字八太の西方の高地一帯も八太の地域に属してゐた事を推定できる。その高地の北の麓に沿つて波瀬川が流れてゐるが、それについては後に説くことにして、その八太の小山から南方に向ひ長さ一里幅二十町程の山地が連なつてゐる。その山地は波瀬川から豊地村に至る緩やかな谷間（そこを街道が東西へ走つてゐる）で終るが、この谷間と北方波瀬川の間に横たはる山脈地帯を今日「八太の横山」と呼んでゐる。この呼び名は東は松阪市立図書館の森田利吉氏から聞き、西は隣村大井村役場及び駐在所の警官から直接聞いたものである。ここに今も土地の人々が、八太の横山といふ名でよんでゐる山岳のある事を学界に報告するものである。

この山名は山の形から来てゐる。この一里程の山なみは高さも二百メートルから百八十メートル台の海拔を持つ峯々だが、同じ位の高さの山が連なつてゐるのでそれを東方の平原地帯から眺めると北から南へ長く横たはつたやうにみえる。この地形が「横山」といふ呼び名を誕生させたのだと推察される。

といふのは、東京の人はよく知つてゐるやうに、東京都の西、八王子市の南から府中市の南へかけて一連の低い山地が四五里に亘つて続いてゐる。西北から東南方へ走つてゐるのだが、これが防人の歌に、

赤駒を山野に放しとりかにて多摩の横山か徒歩ゆかやらむ

20 四四 一七

と詠まれてゐる武蔵の多摩の横山である。この山の姿は伊勢の場合よりも、長さが長いだけに一層横山的である。伊勢一志郡ではそ

れ程の美事さはないが、ほぼ高低のない山頂が長く続いてゐる姿はまことに「横山」といふ言葉に相応しい。

これは万葉集巻一にある名称だが、この八太郎落は、北・東・南が低平な平原だから「八太の横山」といふ名に備する地形をこの辺りで探し求めるとすれば、部落の西及び西南の山岳の外には何処にもその名に相当する適地を発見することはできないといふ事実によつて、この山名は更に裏附けられるわけである。

かくて、波多の横山を、現在の八太郎落のすぐ西に求める事は、最も確実な立論である。これを仮に「第一次的解説」とする。

ところが波多の地域を西方に拡大して考へる意見がある。すると当然の結果として横山も西方に広がつてゆく。その場合、広がり為何所まで認めるか、といふ事が問題になる。

この場合注目されるのは、上掲大日本地名辞書の説である。即ち、八太といふ名称は、古代は現在よりもつと広く、川合村の西に続く高岡村の字田尻及びその西の井闕部落にまで及んでゐたと記されてゐる。これは何によつて下された断案か知り難いが、これによつて八太といふ地域は、現在の字八太から約三十町程西方にまで及んでゐたことがあり得るかも知れないのである。(尙、この田尻・井闕の二字は何れも後述の波瀬川に沿つてゐることを注意しておきたい)

以上によれば八太の地名は、今日の字八太よりもずうつと広い土地名であつたと思はれる。だから万葉の八太の横山の岩を見て作歌したといふ場合も、現在の八太から三十町ほど西方の地域まで含めて考へてもいい訳である。

だが、この八太の地域から余りに離れすぎた処に「川の上の岩」

を求める事は甚だ戒めねばならない。たとへ川の地形が岩石多くて、一見歌の趣に似通つてゐようと、題詞の「波太」の問題の先決条件として、「今確実に知り得る波太の範囲から離れすぎぬこと」と言ふ注意は充分に考慮さるべきである。言ひ換へると、唯今の字八太及び八太の横山から余りに遠い土地は、川の岩の状態如何にかかはらず候補地となる資格は先づないものと言はなくてはならない。

筆者の考によればこのことを考察に入れないうで、唯川の岩だけ探して立案した説があまりに多過ぎる。さういふ誤謬説が氾濫した為、却つて問題の真相が見失はれてゐるとすべきである。さういふ立場の説の一、二を批判してみるに、この川の上の岩を雲出川に求めようとする意見が少くない。菅笠日記其の他この見方を採る有力な學者が有るが、この説には筆者は初めから賛成できない。それは今日土地の人に八太の横山と呼ばれてゐる部分とは、まるでかけ離れた場所だからである。雲出川は倭村から大井村を流れ高岡村に入つて急に北に彎曲して東流する川であるが、八太の横山に一番近寄るのは高岡村井闕の附近に於てである。それにしても横山と雲出川は尙十数町の距離がある。その上その中間部地形は複雑で、この山とこの川とが全然無関係な土地形になつてゐる。それは実地に訪れた人の誰しもが気づくところだが「中間の土地」と筆者の記す範圍内で、まづ横山の裾に接近して波瀬川が東流してゐる。波瀬川の南岸は直ちに山地だが、川の北岸は緩やかに起つて次第に高く河面から百尺余りの高地を形造る。この長い高地の南及び東南方が八太の山地である。さうして同時にこの高地を西北方へ越えた処は巾広い谷間となり、その谷間の中を雲出川が波瀬川の四、五倍の川巾をとつ

て北流してゐる。

以上の如くだから歌の題詞に「八太の横山を見つつ作る歌」とあり歌に「川の上の五百つ岩むら」とあるのは、どうしても横山に接した川でなくてはならぬから、波瀬川の外には考へられない訳である。言ふまでもなく、この題詞と歌とは必ず対照させて解釈すべきだから、若しも歌の中の川が雲出川であるならば、実に変な事になる。つまり「川の上の岩」といふのが雲出川のどんなに近い岩をとつて考へても、それは八太の横山から十余町隔つてをり、しかも兩者の中間に高さ百尺程の丘陵地帯を隔ててゐる。だから雲出川の河畔からは横山は見る事ができない。逆も亦真なりで、横山に居る人は雲出川を見ることができない。歌と題詞によれば山と川の岩とを同時に見て歌んだ歌なのに、雲出川の地形は斯くも横山とは隔つてゐるのである。雲出川の横山に最も近い部分にしてかうである。これ以上遠い部分の雲出川に如何に奇岩怪石が存在しようとも、この万葉の歌には決して適用できない訳である。現に大井村の地で雲出川の東岸（右岸）に百尺になんなんとする大岩壁のある事も事実であるが、何れも八太の横山と離れすぎるから問題にならないと考へる外ない。

それでは波瀬川なら何処でもよいか、といふにこれもさうは行かない。もし川合村から下流に宇八太から離れて岩を探さうとしても、この下流の方は一面の平地で、川の中に岩石のそば立つ状態は見るすべもないのである。反対に八太の範圍を踏み越えて遡るとすれば、これは地形が全体として山地になる訳だから必然的に川は山川となり、川の上や川底に岩石がそそり立つことは当り前の話である。波瀬川の実状もその通りになつてゐる。

だから無制限に川を遡つていいか、といふに、筆者はやはり、その遡行は題詞の制限内でなくてはならぬと考へる。これを言ひ換へると、横山の麓に接触した部分であるべく、せいぜい高岡村井関部落の辺りまででなくてはならないと考へる。そこを離れた候補地は、川の岩といふ条件は十分に満されても、題詞とは無関係な探索に陥つてしまふであらう。

この点で八太の横山から一里近く遡つた波瀬村字下世古の地を候補とする万葉紀行（土屋文明氏）の説は遺憾ながら従ひかねるものである。

これを要するに宣長の「菅笠日記」に記す雲出川も、土屋氏の下世古も、共に遡ればのぼる程岩石多い山川となり、万葉の古態によく適つた心地がして來るものではあるが、この気持に囚はれてしまふことは、學問的探求に於ては極力避くべきものであらう。

(二)

かくて筆者は、どうかして八太の近くで「川の岩石」を発見したいといふ希望を年來抱いて來た。それで川合村・高岡村・大三村を走る近畿日本鐵道の各駅に下車して尋ね廻つて年月を越えたが、その結果適当と思はれる候補地を発見した。又その写真撮影にも成功して、報告の資料が整つたからここにその土地の解説を發表するものである。

ここに赴くには、実は国鉄名松線によるのが一番歩く労力が少い。この線の「伊勢出尻駅」又は「井関駅」で下車すれば波瀬川までほんの三、四十歩で川原に下り立つ事ができる。だがこの線の列車は、運転回数が馬鹿げて少い為、時間の配慮に甚だ苦心せねばな

らない。それで近鉄の「川合高岡駅」で下りて、西方に向つて川を廻るか、「石橋駅」で下車してはじめ雲出川の川岸に出て川を渡り、それから前述の丘陵地帯を横断して波瀬川の岸に出るかである。然るに後者は台風の水害の爲、雲出川のこのあたりの橋が全部流失して今は渡し舟によつてをり、いつ架橋するか分らぬありさまだから、実際には川合高岡駅に下りて、波瀬村まで川に沿うて一里半廻り、帰りは再び川合高岡駅に戻つて来るのが、川及びその岩群を観察するに最も適當であらう。

そこで、唯今「川合高岡駅」に下りた場合を記してみると、駅を出るとすぐ側に西に走る国道がある。それに沿うて行けば十町程で道の南に川が現はれる。さうしてその川が大きく彎曲してゐるのに出遇ふ。それが波瀬川である。本地点では、すぐ南方に見える波多の横山（実は横山の最北端）との間に二、三町の距たりがある。（この事は言ひ換へると、本地点では波瀬川が横山に接触しないで、山裾を離れて北方に彎曲した爲に二、三町の距離が生じた訳である）そこには西北から来た細い支流が合流してゐて、その小流を渡る爲の小橋がかかつてゐる。ところが、ここから七、八丁進むと、川は山にぐつと追つて以後上流に進むにつれて、川の南岸は殆ど全部山に沿うて流れるといふ状態になる。（右記の北方に彎曲した部分には、宇田尻の先端で、これから上流は字井関になる）

従つて、もしここに川原又は川岸に岩石があるとすれば、特に川の南岸に岩石があるとすればそれは題詞にいふ「波多の横山の巖」である。同時に歌の初二句にいふ「河の上の齋つ岩群」であり得る。それで井関の波瀬川の岩石のことを説いてみる。

筆者の実見したところでは、前記の川と道と出会ふ所（川が彎曲

して小橋のかかつてゐるあたり）から下流には、甚だ注目すべき岩石といふものは見当らない。岩石が問題になるのは、井関部落に入つてからである。井関に入ると川の岸、又は川原に諸処、岩や石の類が現はれ始める。特に上記の彎曲部から八、九丁を進んだ南岸に大岩がある。実はこの岩を、川を渡つて実見する事を未だ怠つてゐるのだが、道々で岩のことを問ひただした川合村の人々や、大井村の村役場の吏員藤川道也氏及び同村字大仰の警察官谷口菊夫氏の談話によると、その岩は今平岩（つづみ）と呼び、覺教八覺敷程の巨大な岩である。その辺りはもと川原であつたのを、岩や砂石を取り除いて開墾して畑になしたところである。だが岩の根もととは地盤に連絡してゐて、取り除くことも不可能なまま残されてゐるとのことである。——これで見ると、この平岩などはその巨大さもその位置も確かに横山の岩石群の代表たる資格がある。

この平岩の地点から、やや進むと道路と国道の線路が交叉する。その交叉点の所に鉄橋が出来てゐて、鉄道が川を横切るののであるが、その鉄橋から見渡せる下流の辺りは、川の岸に大きな岩が散見できる。岩以外の川原一帯もそれまでの砂川原でなく岩石の川原となり始める。

転じて鉄橋から上流を眺望すると、この辺りから上流は、万葉の河の上の岩群の相貌を、より著く残してゐる。挿入の写真は鉄橋から二、三十間上流の川原で撮影したものである。南岸に山裾が断崖の姿で川に接触するところに巨大な岩石が群がつてゐる。その岩を撮影したものである。この写真の状態の集岩を「河の上の五百つ岩群」と歌ふことは、何人でも当然の写真句だと承認するであらう。

然るに注目すべきは、この地点は現在の字八太から僅かに二十余町

を距たるにすぎない近距離だと言ふことである。行政区劃を言へば上記地名辭書に「ここまでは古代八太の範圍であつた」と説く、高岡村字井関に属するのである。つまり古代の八太の範圍の中に、かういふ岩石群が今以て存在してゐる。しかもおあつらへむきに川の岸に群がつてゐるのである。川の附近は今の人力の及ぶ最大限度にまで、畑所に変へたり家を建てて宅地になしたりしてゐるから、年々岩石は邪魔物として除いたり破壊したりしたと見るべく、一千年前の川岸の岩群は今と比べられぬ程著大だつたと考へていいであらう。

これを以て見れば、かういふ適地を離れて遠くの波瀨川の上流や、或は水系を全然異にする雲出川の河畔を探索することは全く不必要である。

さてここからは、一歩一歩と山川の相貌が顯著になつて来る。川原は泥土でなくて岩か小石かである。採集し得たところではその石は花崗岩である。花崗岩でなくば、花崗岩の崩れた白砂である。そこに野性の榛の木や、川柳や、トコロヅラ・すすき・茅萱・アカメガシハ即ち久木等の万葉植物が一面に生えてゐて、まるで赤人の「ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥教鳴く」の有様を今の現実（じつじやう）に提示した觀があつて、実に楽しい見物である。

かういふ岩と植物との交響樂が、国鉄「井関駅」まで連絡してゆく。駅附近からは、河岸が高く聳えて水は直接兩岸の崖の根もとを洗つて流れ下つてゐる。そこを川に沿つて廻りつゝ注目すると、川の兩岸の水に接するところは殆どみな大岩石である。中に三百尺を超えるところは一枚岩が寝念と静まりかへつて、山川の清水にその影を映してゐる清潔さは、一種莊嚴の姿であつて、太古の人が

岩石を畏怖して、神とまで讃へた氣持がひししと身に迫る心地がする。

但しここに注意しておきたいのは、この井関部落の岩岸が、従来万葉研究家の眼から全く見落されてゐたのは、一面無理からぬ事情もあるといふことである。

それは一千年前は決してさうでなかつたと思はれるが、現在はこの岸の岩盤の上に二十尺程の厚みで土がかぶさつてゐる。その表土に杉・竹・樺・檜木等を植林し、又いささかでも地形の平たい場所には、殆ど寸土を余さず家を建て、畑に変化させてゐる。従つて万葉研究家が來訪したとしても、歩行して水ぎはまで降りて觀察せぬ以上、列車・電車・バス等に乘つて、その車窓から見てこの土地を通過した程度では、さういふ森林や畑だけが見えて、表土の下の岩には氣がつかない。岩の群は、普通の街道から川原に下り、水辺に立つて見渡す時に初めて發見出来る。これがこの辺りの山裾の岩（それは即ち波瀨川南岸の岩）が、これまで全く見落されてゐた原因である。

(三)

そこで筆者の説くところは、さういふ表土がまだ出来てゐなかつた一千年前に、この川の岸の附近に累累たる岩石の群があり、それを万葉人が「河の上の五百つ岩群」と詠んだと主張したい。

この現状を万葉当時に復元させて考へるといふことは、筆者一人の勝手な想像などではない。次に列挙するやうな確實な根拠に因るものである。

(1) 前記の田尻部落の彎曲部までは、我等の歩む国道は平野の中

を来たのだが、井関部落に移るにつれて、道は両側に山が迫つて、「山ふところの道」又は「山峡の道」に変わる。そこを我々が歩みつづ左右の山に注目すると、山は前にも説いたやうに杉や櫟の明らかに植林と見える森や林に覆はれてゐるのだが、その諸処に岩の露出したものが非常に多い。歩みながら注意して数へると、忽にして十数個処を発見出来る。これは長雨の爲土がゆるんだり、その他の事柄で、樹木や土砂が山の峻しい斜面を落下する。その後山の本來の地肌である岩石が露出したものと思はれる。さうでないといふと、この山峡の殆ど全部分に亘つて似た現象が起つてゐるのを説明出来ないやうである。(この推定は、後述のやうに土着の人の賛成を得た)

(2) かういふ山の岩や川原の岩は、現在表土や草木に覆はれてゐる。その表土は長年月の間に自然に岩が土に變つた場合もあらう。だが人間の手で現在の状態になした部分も亦多いと思はれる。現に

道の傍や、川岸に家屋の有る場合、邪魔になる岩や石を道の傍や宅地の隅に、一緒に取りまとめて放置した場所が諸所にある。これで見ると、部落の外へ運んで取り捨てた岩や、人力で碎かれて小石や土に変化した岩もあらう。而してこれは植林や宅地開拓の爲だが、一方畑や山林に植物が植ゑられると植物の力で岩石が土壌化される速度は一層速くなる——以上のやうにして、一千余年間かかつてこの辺りを人間の力によつて「岩石地帯」から住みよい「土の地帯」へと変化させたのが今見る川合村、高岡村の現状だと筆者は考へる。それが爲に、川岸の水に接する部分は岩で、その上に二十尺程の表土をかぶつた地形が多いのであらう。

(3) 川そのものが上流から年々土砂を運んで川岸や河原の岩石を土砂で覆うてゆく。とりわけ近年凄じい洪水が多い。その場合波瀾

川の水勢が直接岩を破壊したと見える場所や、押し流された砂が岩盤を覆うてしまつたと判断される地点が、川原や川岸にいくらかも見出来る。又、洪水等の大地変が無いとしても、岩石は風化して土に変わり易いこと、地質学の教へるところである。国鉄「井関駅」のすぐ西の所を北行して井関から大井村大仰へ出る新開の切り通し道がある。そこなど、道の両側は、岩が土になりかけた、岩とも泥とも言ひきれぬ性質の崖が続いてゐるのはその一例である。

(4) 以上は三重県和具町の志摩高等学校山口源三教諭と二人、昭和二十九年十一月下旬波瀾河畔を探究し歩いた折に、二人の合致した意見である。それを上に記した大井村役場の藤川氏と警察の谷口氏とに話したところ、1・2・3の説に賛成されたのみならず、尙次の事実を教示された。即ち筆者や山口氏の見落したところだが、実は井関部落に於ける波瀾川は、今も川底は殆ど皆岩である。それに泥がかぶつて岩とは見えない状態になつたにすぎない。さう言つて前記の「平岩」の存在を教へられたのである。

(5) 引き続きいて両氏が話されるには、もともと井関の土地は岩山で、この地域から出る石を井関石と呼ぶほど石の産地である。だから大井村の辺りでも、家屋の土台石にはみなこの井関石を使ふ代々の村人の習慣であつた。現に字大仰の小学校の大きな建築等の土台石は、全部井関の石である。ただ最近ではセメントがたやすく手に入るし、運搬にも便利だから、セメントを使つて井関石の土台を使はぬことになつて来た。

(この両氏の話聞いて、建築石材の多年の採取は、我々の今見る井関の状態が、石を取り除いて「石の世界」から「土の世界」へ人力で変化させられた事の、有力な証拠だと考へざるを得なかつた)

かくて、古代の波多の横山の川に臨んだ地域には、今筆者の発見した何十倍の岩石群が古代はわだかまつてゐた。それを十市皇女も、吹黄刀自も驚嘆の眼を以て見たが故に、この名歌と題詞が生れたものと考へるのである。

(四)

ここで筆を岩石から引離して、街道の事を説いてみたい。街道を研究する目的は、この歌と題詞の場合「大和から伊勢へ行く道が何処を通つてゐたか？」といふことが常に問題になるからである。

といふのは、若し河畔に在る岩を或る地点で発見したとしても、その地点が街道から離れてゐれば、この歌には無関係となるからである。題詞はこの歌が、天武天皇の時代十市皇女が伊勢神宮に参拝されたときの作歌なることを明記してゐる。だから岩の存在した地点は、参拝の途中の街道筋を離れぬ地域だつた筈である。この点から考へると、現在大井村字石橋からよく見える雲出川（その川の右岸）の一大岩壁の如きは、岩そのものとしては類稀な見事なものだが、街道との関係といふ点で真先に落第してしまふ。

同時に、筆者の挙げた井関や田尻の石群も、井関や田尻の土地が伊勢参宮の道筋に当つてゐなかつたとすれば、これ亦落第である。だから街道の重視すべきは勿論のことである。

ところが古代の通り道と言ふのが、どう調べてみてもはつきりしないのである。そこで現在までの学者の説は、みな江戸時代の伊勢参宮道路を基にして論じてゐる。そこでこれ迄の公知の道筋をここに取上げてみたい。

先づ問題となるのは家城村の北家城までは今の問題に無関係だとして、次に川口村の字西之口である。実はこの地点に、聖武天皇が天平十二年十月、太宰少貳の官にゐた藤原広嗣が謀叛の軍を起した為、聖武天皇はその災禍の及ばん事を恐れて、奈良京を離れ、伊勢から山城へ巡幸された事がある。その時、川口行宮に宿られた事が6巻一〇二九の題詞に見えるが、その川口の行宮がここにあり、ここには現在昭和十八年十二月五日その行宮所在地を明示する為建てた八尺程の四角な石標や、記念碑が建つて居り、疑問の余地がないと思はれる。だから十市皇女の一行も、恐らくこの地点を通過されたであらう。或はここに宿泊などされたかも知れない。

然るにここで問題となるのは、道がここから北と南との二つに分れることである。いづれも東の伊勢平野に向ふので、先では合流するのだが、北を通る道は、初め雲出川に沿うて稍々東北に進む。一里程で今の大三村に至り、そこで東南に転じて大井村字大仰に至る。それから大仰に隣る高岡村井関・田尻を経て波多の横山の北の山裾を廻りつつ、川合村八太に達する。(以上の内、井関から八太までは雲出川を離れて波瀬川の北岸に沿ふ訳である)

この道筋は、山と山との谷間を通るのではあるが、大仰に至るまでの一里半余は谷を挟んで南北に山が連なつて、両山の間は十町程の間隔を保つ広い山峽の平原地帯である。そこを雲出川が流れてゐるが、低平な平地を進むのだから道は極めて楽である。宣長が伊勢から大和に入つた「菅笠日記」はこの谷間を八太から井関、それから大三村へと廻つて歩いたものである。

この地帯は早くから開けて居り、住民が住んだらしく古墳があり、又土器その他の発掘物が各処に現はれてゐる。しかも問題の八

太の土地を明らかに通過する道筋である。又八太の横山も見る事が出来、その上横山と川及び川の岩とを同時に見得る土地であること上乗詳説し來つた訳である。さうして、この谷間は江戸時代の伊勢参宮の一つの通り道になつてゐたのである。

ここで特に注意しておきたいのは、問題の題詞の文章は波多の横山を見て、畝んだと記すのである。だから横山を通過しなくともいい訳である。筆者の立論は「横山は眼に見はしたが、通過しはしなかつた」といふ判断の上に立つものである。

但し、横山を通過したとすれば、ここに藤川道也氏と谷口菊夫氏の教へられた江戸時代の特殊な参宮街道を紹介しておきたい。それは大和の長谷の峽谷から伊賀国に入つて名張を通り、東行して伊賀国の阿保・伊勢地を経て、大井村で雲出川の沿岸に出て川を渡る。そして字大仰を通過して、井関に入つてから波瀬川を南へ渡る（つまり、波瀬川と縁が切れる訳である）。そして井関部落の南の高合にある高岡村字東山に入り、それから山峽の道を真南へ二十丁程進む。この時波多の横山の山中を通る訳である。（正確に言へば横山の西の部分を通る訳である）——すると波瀬村か豊地村へ出る後述の伊勢街近とT字形に交はる。そこでその伊勢街道に移つて、豊地村の平地に出るといふ道筋である。

これだと井関部落の辺りで、波多の横山と川岸の岩とを見て、それから井関の土地を離れて東山部落へ入るといふことになる。

この話を聞いた時、山口氏も筆者も非常に喜んで新しい道筋の発見を祝福したのだが、東京に帰つて静思したら、必ずしも波多の横山の山中に分け入ることが、この題詞で必要だとは思へなくなつた。それで現在の筆者は、矢張り井関から田尻、田尻から八太の道

筋を辿つたと考へるものである。

宣長も十市皇女はこの谷間の道を進まれたと見る。その点は結構だが、岩の候補地を大井村の雲出川沿岸だと説く点が賛成しがたい。それだと、今の波太郎と離れすぎるのである。

ところが、この谷間の道と違つて、川口村西之口から南へ分れる道がある。これは前記の平地を迎えるのは違ひ、山越えして波瀬村に至り、同村の下世古部落から再び山越えして、豊地村に出る道である。伊勢平野に達する迄の距離は両者同距離である。ただ平地に入つてから、後者の山地を通る道の方が、南へ出るだけに伊勢神宮には若干近くなる。江戸時代の道も利用されたさうである。

それで、土屋文明氏は「万葉紀行」でこの道を通つたと見て、新説を立て、岩を見た土地を波瀬村の下世古だと唱へられるのである。もし、現在の川合村八太と下世古との距離が今よりずつと近く、一方に下世古が波多の横山と半里以上も離れてゐる欠点がなくば、この波瀬村越えの街道も生かして考へ得るであらうが、現在までの資料では、直ちには賛成しかねると思はれる。

波太の岩石の候補地は、この外にもなほ唱へられてゐる。しかし、その全部が「万葉紀行」と同じやうに現在の川合村字八太から遠距離すぎて、首肯できないのを遺憾とする。

この調査は、数ケ年にわたる何回もの探訪でやつと成果をあげたものだが、この間、三重県の方々から終始厚い御協力を得た。中には中条照雄氏・森田利吉氏・山口源三氏・藤川道也氏・谷口菊夫氏には直接各種の御助力をいただいた。厚く御礼申上げる。尙、予定では自分で撮影した横山の岩石群の写真を描けるつもりであつたが、病氣した為編輯事務を遅らせて不可能になつた。次の機会を待つこととした。